

『平家物語』における頼朝像

川田, 正美 / KAWADA, Masami

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

13

(発行年 / Year)

1984-12-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019412>

『平家物語』における頼朝像

川 田 正 美

1

『平家物語』の頼朝像については、早く石母田正氏の名著『平家物語』に次のような指摘がある。

頼朝も物語に何度も登場してくるが、それが義仲や義経にくらべて、いかに生彩のない表面的な描き方であるかは、平家を一読した人ならばただちに気がつかれたにちがいない。いうまでもなく頼朝は後白河法皇とならんで、平氏滅亡の歴史において決定的な役割を果たした人物である。しかし頼朝は、直接戦場に出て指揮したのは、富士川合戦までの初期の段階であって、その後は弟の範頼と義経を大将として指揮させ、自分は背後にあって、もっぱら獲得した地盤を固めることと、対京都の政治的工作に専念したといつてよい。彼の政権は篡奪者の政権であるという弱さをもっていただけに、その政策は周密な計算と駆引きをともなったもの

であって、この政治家としての行動に頼朝の人間としての本質が存在した。それは舞台の背後にることによって、その才能を発揮するような人物である。このような人物を、義仲や義経のように、直接戦場で活動する人物と同じように、物語作者が描き得なかったのはむしろ当然のことであつたろう。

たしかに頼朝は後白河法皇と並んで「直接戦場で活動する人物と同じように」は描かれていず、それは右にいわれるような理由に拠るのであろう。しかし平家に描かれた頼朝を辿っていくと、「自分は背後にあって、もっぱら獲得した地盤を固めることと、対京都の政治的工作に専念した」政治家らしい姿は黒々と映っており、『平家』はそれなりの方法で「舞台の背後にることによって、その才能を発揮するような人物」を「描き得」ているように思われるのである。そこで小稿は、氏が原拠にしたと思われる語り本平家の頼朝像を改めて追うことによって、その叙述方法の一端を探ってみよう

と思う。(底本は日本古典文学大系本)

2

頼朝を描くに当たって『平家』がまず目指さねばならなかったのは、彼の登場を歴史の必然として読者に認知させることであつたろう。専横者清盛を倒す者は人望を集めた者でなければならず、「知行の国卅余箇国(巻一「吾身栄花」)」というほどの権力をもつ平氏に対してはこれを討つだけの武力も備えた者であらねばならない。打倒平氏を企てた者は過去にも存在したが、成親、俊寛、西光らの場合は前者の資格に欠け、以仁王、頼政の場合は後者の力に及ばず共に敗退した。平氏を倒し得る者は、結局は平氏と対極にある源氏でしかないことが時間の経過と共に知られるわけだが、その血統を受け継ぐ頼朝が、右のような資格を備えた者であるか否かを『平家』は明らかにせねばならないのである。我々は『平家』で頼朝が舞台裏の人物としてふさわしく描かれているかどうかを探る前に、彼が歴史的必然性をもつ人物として描かれているかどうかを、まずその登場ぶりにみてみたいと思う。

彼はまず巻三「行隆之沙汰」において、かねて清盛にいらまされていた前関白基房の家来遠成家成父子の会話の中で、平治の乱後、伊豆国に流されていた頼朝が頼りの存在だが彼は勅勘の身で動けぬ、と語られる。(もっともこの条がみえない百二十句本では、次の箇所が頼朝初出ということになる。)次は巻四「源氏揃」において源三位頼政が高倉宮に奮起を促す処で、諸国に雌伏する源氏を列挙する中に見える。そして次には巻五「物怪之沙汰」において、源雅頼

の侍が見た夢の中で平氏の預った節刀が頼朝へ渡される、というように出てくる。このようにひと巻に一度ずつ、今は伊豆に流されている頼朝が源氏の利器であり、いずれは棟梁となるべきことが点描されていく。そして遂に巻五「早馬」の段で、その頼朝が蜂起したことが大庭景親によって平氏の許へ報ぜられ、彼が歴史の表舞台に躍り出たことが確認されることになるのである。

だが、彼はここではまだ石橋山で破られ、友軍の三浦一族も敗走するなど、平氏に打撃を与えるまでには至っていない。にも拘わらず平氏側の動揺は大きかった。若者こそ「打手に向かおう」と力んでみせるが、大方は元源氏方武士が心配ないと受け合っても半信半疑。そして清盛は、昔の恩(平治の乱で死罪を流罪に緩和した)を忘れた奴だと激怒し、「只今日のせめかうむらんずる頼朝なり」と呪う。このように当の頼朝は敗退しているにも拘わらず、彼が蜂起したこと自体、平氏を混乱状態に陥し入れるだけのショックを与えている。そしていずれは、彼の下に馳せ参じる者が少なからず出るだろうと予測されるほど頼朝への期待は高く、それがもちろん彼の武力拡大につながっていくこと、だからこそ清盛は幼少の頼朝を斬るべきだったと後悔したのだということが描かれるのである。

このように語り本『平家』は、頼朝がまぎれもなく平氏をゆるがす旗手であることを、すべて人の口を通じた客観的な形で裏付けていくのである。しかし『平家』の作者自身は、平氏と真向から対決するこの人物を「朝敵」と規定せざるを得なかった。これは、頼朝をば「朝憲を嘲る」者とみなし、彼の計画を「奸謀」と呼んだ平氏と同じ観点である(巻七「平家山門連署」)。作者によれば清盛は悪

業者であり、その清盛を倒す人物の登場は喝采を以て迎えられる筈なのだが、清盛を頂点とする平氏が体制側である以上、頼朝は「朝敵」と呼ばれざるを得ないわけである。しかしその烙印を押すのは建て前の上でしかないことは、謀反人に未来のないことを力説する巻五「朝敵揃」や「咸陽宮」にはのを見せている。前者に挙げられる「朝敵」の最初は神武時代の「土蜘蛛」だが、彼が官軍によって殺された理由の「人民をおほく損害」したというのは、むしろ平氏にあてはまることであろう。また次の「咸陽宮」では、謀反の徒が失敗に終わった中国の例を引いて反逆の空しさを説くのだが、この長い話が覚一本では、

秦の始皇はのがれて、燕丹つるにほろびにき。「されば今の頼朝もさこそはあらんずらめ」と、色代する人々もありけるとかや。

と結ばれている。平氏にゴマをする「人々」の外交辞令を、更に「とかや」という不確かな形で紹介しているところに、「朝敵」の呼称は作者の本音でなく、世俗的常識に従ったに過ぎぬことが窺えるのである。

このように、頼朝が名実共にニューリーダーの有資格者であることの客観的叙述は、建て前を重んじる作者の主観的補筆によって塗りつぶされるかにみえながら実は、その律義な記述ぶりがかえって、「朝敵」なる通俗的レッテルをばいずれ免除されるであろうことを（とりわけ覚一本は）窺わせる。そして以上のことは、頼朝へ

の評価をますます強固にしていく結果を生んだといえるのである。

3

こうしていよいよ頼朝の出番となるのだが、『平家』はここで一旦物語の進行を中断し、頼朝がなぜ謀反を起こすに至ったか、その経緯を時間を遡って語る。それが巻五「文覚荒行」以下「福原院宣」に至る章段である。ところで頼朝が「舞台の背後にいる人物」である以上、その描かれ方の多くは間接的にならざるをえないわけだが、そうした中でこの「福原院宣」は、頼朝の姿が直接的に描かれる数少ない部分の一つであるといえよう。とはいってもこの章段は甚だ虚構性の濃い部分である。頼朝の挙兵に周囲の人物が関与したこと（『愚管抄』では「光能」）や、文覚と義朝の頭骨との関わり（『玉葉』元暦元・八・二二条）は史実として認められるにしても、伊豆配流の頼朝と文覚が交渉をもったのは承安三年五月（文覚伊豆に流罪）から治承二年（文覚帰京）の間しか考えられぬのにこれを頼朝挙兵の治承四年のこととしたり、文覚が伊豆から福原までを僅か一週間で往復したとか、幽閉同様の法皇から院宣を受けたとか、全体に荒唐無稽な筋立てで運んでいるからである。

一体、このような現実離れた超能力者をなぜ『平家』は頼朝の相手にすえたのかといえば、それはあの強大な平氏を覆すような事業を成し遂げた男に入れ知恵をした者ならば、更に測り知れぬ力を具備していなければならぬと考えたからにはかなるまい。けれども我々は、このように虚構に満ちた本章段から、意外に頼朝の実像をつかみとることができるように思われるのである。

まず頼朝の人物を見込んだ文覚の勧めに対し頼朝は「おもひもよらぬ事の給ふ聖御房かな」と頭から応ぜず、平氏の恩（池の尼御前に命を助けられたこと）に固執する。清盛は前述の通り「其恩忘て当家にむかつて弓をひくにこそあんなれ（「早馬」）」と激怒していたが、簡単に恩を忘れる彼ではなかったことが知られる。そこで文覚は、義朝の頭骨とやらを取り出して、自分がこれを長いこと首にかけ吊って回ったと頼朝に売り込み、彼の心を揺さぶろうとする。ここで頼朝は「一定とはおぼえねども」、「父のかうべときくなつかしさにまづ涙を流し、其後はうちとけて物がたり」するのである。ここまでの記述からだけでも、頼朝という人物を考えるのに多分に留意すべき事柄が含まれているよう。

第一に彼は、話にすぐに飛びつかぬ慎重さの持ち主である。それは本人の言うように平氏一族への背反はしたくないという倫理的理由だけではない。彼は自分の限界をよく心得ていた。すなわち伊豆の蛭嶋に流されたえず監視の眼に曝されていた源氏嫡流の身という限定に加えて、全国に点在している源氏系の武士がどこまで従ってくれるかは保証の限りではなかったということである。

しかし彼は文覚の熱意にほだされ、一步を踏み出す。彼の頭骨までも用いた演出をマユツバとは疑いつつもそれを頭からナンセンスとあしらわなかったのは、そのような虚偽を用いてまでも自分を盛り立てて蜂起を促してくれる者の存在に心を動かされたからであろう。人間はあるハードルを飛び越えることによって今以上の可能性を切り拓き得ることがある。しかし多くの場合、ひとはさまざまな条件を理由にそれを避け安泰の道に甘んじてしまいがちである。頼

朝もそうした一人であろうとしたのだが、文覚というよき誘導者に応えて、あえて限界に挑戦したのであった。だから彼は決して天才ではなかった代わりに、人間の意を汲むことのできる人物であったことが以上の記述からだけでも読み取れるのである。

ここで読み本系に目を転じると、語り系でみたような慎重な頼朝とは違った彼の心の内が覗かれる。文覚の勧めに対して四部本では、

南無八幡大菩薩二所の権現願は与_レ下_レて神力を遂_下へ多年の所望を
且_ハ果_シ己父の素懷を_二且_ハ奉_ラむと息_メ君の御憤_リを_二思_フ心深_ケレは
契_下上総の介弘常、三浦の介義明以下_の兵を_上窺_レ隙を_二物をと_一思_下ケレと
も……（延慶本も同様）

と、心中では少なからずはやったことが記されている。しかし「文学ニハ不_レ打解_下は」表面上は覚一本と同様の対応をしているのである。このように読み本系が頼朝の内部に分け入ってしまうのに対しここでも覚一本など語り系では、あくまでも表面上の動きを追う叙事的記述を守りながら頼朝の実像に迫っていることが特筆されよう。

こうして文覚を信用して本題に入っただけのもの、彼の話はどうも大きすぎる。文覚自身も勅勘の身でありながら院宣をとると請け合ったり、福原まで三日で行けると豪語したり……。ともかく文覚を送り出した間頼朝は落ち着かないが、これも四部本、延慶本に無いところで、並の人間と変わらない親近感を懐かせる動きである。

さて待望の院宣が届くと頼朝は「かたじけなさに手水うがひをし、あたらしき烏帽子・浄衣きて、院宣を三度拝してひら」くとい

う恭しさで迎える。既に院宣と宣旨のどちらが上かといった内容（『保元物語』）が飛び出すほどの權威がぐらついてきた時代に、このような頼朝の敬虔な態度は目をひく。無論この院宣が身柄釈放のパスポートである以上、彼の有難がるのは当然といえよう。しかしただ有頂天になるのではなく、その院宣を一定の儀式を以て拝受するところに、保守的なものをないがしろにせずそれと共存する彼の姿勢がみてとれる。古代体制側をも巻き込みつつ歩を進めようとする彼の特質が、ここに現われているように思うのである。この「手水うがい」は、富士川合戦で今度はあっけなく勝利を収めた際にも、

兵衛佐、馬よりおり、甲をぬぎ、手水うがいをし、王城の方をふしをがみ、「これはまったく頼朝がわたくしの高名にあらず。八幡大菩薩の御ばからひなり」とぞの給ひける。（『五節之沙汰』）と再びみえる。ここでも自分の力を誇示せず、伝統的な礼節を守る頼朝の態度が表われている。保守体制との協調自体は平氏の重盛にもみられたところだが、彼の場合は没主体的に全面依存してしまっている点で似て非なるものといえるのである。

頼朝の蜂起は木曾の義仲を刺激し、富士川戦での快勝は河内国の謀反をはじめ、九州・四国の平氏離反をもたらした。義仲軍は破竹の勢いで進軍し、清盛を失った平氏は遂に都を追われ屋島に逃れる羽目となる。

かくて頼朝が再び我々の前にその大成した姿を現わすのは、巻八「征夷將軍院宣」である。「ゐながら征夷將軍の院宣を蒙る」ほど

「武勇の名譽長」じた頼朝であったが、「いかんが私でうけとり奉るべき」と鶴ヶ岡八幡の「若宮へまいりむか」う謙虚さ、院宣の受領使に「君（＝頼朝）の御ために命をすてたる」三浦大介の子義澄をあてる義理難さは昔ながらであった。

そしてまた、ここから彼の政略家としての面目が躍如としてくる。初めて国家機構の尖端に触れる機を得た頼朝は、この儀式を最大限に活用するのである。まず院宣拝受に当たっては一門の武將を総動員してその勢力を誇示する。院の使いが「家子二人、郎等十人具し」てくると、こちらの使いも同等の人数を配させる。しかも実は「十人の郎等」とは、「大名十人して俄に一人づゝしたて」た即成のものであった。頼朝側の使者・三浦義澄の「かち（褐）の直垂に、黒糸威の鎧きて、いか物づくりの太刀はき、廿四さいたる大中黒の矢をひ、しげどうの弓脇にはさみ、甲をぬぎ高ひもにかけ」た装束が院側の使者・中原泰定にはどのように映ったろうか。時代の流れが痛感されると共に、それを見守る周囲の目には院宣を受ける側の方が授ける側よりも大きく見えたことであろう。

また使者への饗応の場では、鞍付きを含む馬三匹ひき、厚綿の衣、小袖を長持に入れ、紺藍摺の白布千反を詰め、美麗豊かな盃飯を盛るといった具合であった。これらは安徳天皇誕生の際、重盛が金銭九十九文を皇子の枕元に置き（巻三「御産」）、清盛が砂金一千両、富士の綿二千両を法皇へ進上した（『公卿揃』）ことを想わせる。だが平氏の場合は「入道相国うれしさのあまりに」なされた成金趣味に過ぎなかったのに対し、頼朝の場合は（使者へのねぎらいというよりは）次に述べるような明確な政治的意図が働いていた、

その相違を見逃してはなるまい。すなわち政治家頼朝の真価が一層發揮されるのは、使者を手ぶらで帰すことをしない「次日」からである。大將軍の院宣を授けてお役御免と思いきや、泰定は「兵衛佐の館」へ招かれる。そこには源氏一門、大名小名がずらりと居並び、そこへ布衣に立烏帽子姿の頼朝が悠然と現われる。「顔大きにせいひ」くいながら「容貌悠美にして言語分明」の彼は、この機を逃さじと次のように新たな院宣を要請するのであった。

平家頼朝が威勢におそれて宮をおち、その跡に木曾の冠者、十郎藏人うちいりて、わが高名がほに官加階をおもふ様になり、おもふさまに国をさらひ申条、奇怪也。奥の秀衡が陸奥守になり、佐竹四郎高義が常陸介になつて候とて、頼朝が命にしたがはず。いそぎ追討すべきよしの院宣を給はるべう候。

この中で頼朝は、まず平氏が都を落ちたのはわが威勢に恐れたが為と胸を張り、わがものの顔の義仲らを追討する院宣が発せられるのは当然だ（「院宣を給はるべう候」という強い調子に出ている。「べう候」が無く全体的に婉曲である屋代本や中院本・文録本よりもかなり高圧的な物言いであるといえる。この出し抜けの要請（むしろ要求だ）に対し、泰定は、肝心の院宣再交付の可否には答えぬまま、自らの名簿を差し出す所存を述べるといふ意外な対応を示す。名簿を差し出すのは服従の意志表示でもあるから、院の使いとしては出過ぎた行為である。それだけ泰定は動揺していたとも考えられるし、或いは院と頼朝の板挟みに窮したとっさの応急措置だったの

かもしれない。いずれにしてもここでの頼朝は、それほど体制側の意表を突く大胆な挙に出たわけである。

ところが泰定の態度をみた頼朝は、「わらって」「当時頼朝が身として、各の名符おもひもよらず。さりながら、げにも申されば、さこそ存ぜめ」と言うのである。彼は新たな院宣が発せられぬことは百も承知であったのだ。してみると泰定に揺さぶりをかけた意図は、院の使者である彼をも自分の側に引き入れようとするにであったとみえる。「わらって」とは、うろたえる彼から、服従してもよい言質をまんまと引き出したことによる快心の笑みであろう。頼朝は大將軍の院宣を得るといふ最大の榮譽を受ける際にもなお、組織の拡大を心していたのである。だから前日の泰定への豪奢なもてなしは、彼の気を緩めさせる為の策略だったわけであろう。その作戦が功を奏したからこそ、「けふばかりは逗留あるべし」ともう一日引き留めた「次日」、腹巻、太刀、弓、野矢、三匹に鞍置いた馬十三匹、家子郎等十二人にもたせた直垂、小袖、大口、馬鞍、そして荷をつけた三十四の馬など数々の引出物をもたせたのであろう。更にまた道中の宿泊所ごとに十石もの米を置くという恐るべき待遇をしたことは、「頼朝の器量ある事を世にしらせんがため（『平家物語抄』）」と同時に、泰定の気持を後戻りさせない物量作戦ともみられるのである。「鎌倉出の宿より鏡の宿（滋賀県蒲生郡竜王町）」に至る広範な地域すべてに、豊富すぎて貧困者へ処分したほどの米を置かせた頼朝の勢力範囲の広大さと財力の豊かさ。そして「福原院宣」で文覚の帰りを後悔しながら待っていたあの初々しい姿から、本段での法皇を向こうにまわして使者にカマをかける大胆不敵な像

に至る飛躍的な成長が読者をうならせるに充分である。

このように成長した頼朝はまた、部下の指導性にも抜きんでていた。それを十全に物語るのが覚一本における巻九「生ずきの沙汰」である。名馬「生ずき」をめぐる佐々木、梶原の競り合いは頼朝の画策の結果だが、覚一本では頼朝が何ゆえにあれだけ懇望した梶原に与えなかった生ずきを佐々木に与えたかが不明である。しかし覚一本以外の諸本ではその理由が明らかにされている。すなわち四部本・延慶本では、佐々木が亡父秀能の葬送中ではあったが、鎌倉殿の御前に遅ればせながら参じたその孝養ゆえであり、また斯道本、竹柏園本、鎌倉本および闘諍録では、

「和殿力父秀義ハ故左馬頭殿ニ奉_レ属テ保元平治両度ノ合戦ニ致_レ忠_ニ中ニモ平治ノ合戦ノ時六条河原ニテ不_レ惜_ニ命_ヲ役_キ其奉公ヲ思ハ和殿及モ不_レ思_ニ疎存知セヨ是ニ乗テ宇治川ノ真前仕_レ」(鎌倉本)

という頼朝の言葉を載せているからである。だが覚一本はあえてこれらを削除した。それは頼朝には右のような狭い理由からでなく、何らかの深い思慮があったかの如き効果を生み出すことを狙ったからであろう。つまり、頼朝は猪突猛進する梶原と機転にたけた佐々木との仲を、対立としてでなくライバル意識に孵化させ、あり余る両者のエネルギーをうまく競わせる形で源軍勝利への方向に導こうとした——しかもそれはまかり間違えば二個の剛勇を共倒れにさせ

る危険を内包した賭けにほかならなかった——。そのような深謀遠慮を享受者に想定させるのである。

以上のことから、たしかに『平家』における頼朝の実像は他の主要人物ほど多くの分量をさかれていないが、これまで追ってきた形象だけでも、歴史をリードしてきたその大きさはよく把握できるといい得るのではなからうか。

4

我々は、これまでのいわば直接的に描かれた頼朝像が簡にして要を得ており、とりわけ覚一本を中心とする語り系では独特の造型を遂げていることをみてきた。しかし『平家』における頼朝形象の成じいかんはむしろ間接的部分にかかっている。なぜなら『平家』が平家の物語である以上、源氏の、それも棟梁の頼朝は平氏にとって最も遠い位置におかれる書きにくい存在だからである。『平家物語』で頼朝を描くことは、その意味でなかなか力量を問われる対象であったと思われる。そこで我々は次に、頼朝をとりまく人物たち——義仲、義経そして平氏の武將ら——の眼を通して彼がどのように描かれたかを追ってみることにしよう。

まず義仲であるが、彼は前述したように巻七「廻文」で、

「兵衛佐頼朝既に謀叛をおこし、東八ヶ国をうちしたがへて、東海道よりのぼり、平家をおひとさんとすなり。義仲も東山北陸両道をしたがへて、今一日も先に平家をせめおとし、たとへば、日本国ふたりの將軍といはればや」

と青年らしい覇気を以て登場したのだが、連戦連勝で平氏を都から追放させるほどの華々しい成果を挙げながら、その粗野で一本気な性格ゆえにたちまち頼朝の猜疑心をつのらせることになる。従って巻七「清水冠者」の冒頭は、いきなり頼朝と義仲の間に「不快の事ありけり」と始められる。両者相向かう緊迫した空気の中で、義仲は内輪もめの無益なることを説き、行家の義仲側に走った行動が頼朝の怒りの原因かもしれぬがそれは義仲に何ら他意無きことを告げる。しかしなおも或る者の讒言を信じて攻撃しようとする頼朝に、義仲は嫡子を入質として差し出すことで彼の誤解を解くという構成に本段はなっている。語り系は、「不快」の原因が行家の行動にあるらしいことが義仲の口を通じて暗示されること、一方頼朝に讒言した者の存在が頼朝の口を通じて明示されること、の二点に示されるように、不和の要因があくまでも二人の口を通して間接的にほめかされている点が特色である。

ところが読み本系に目を転じると、彼等の対立を生む背景が直接的に明快に記されている。まず行家の行動については、四部本は義仲が使者を派遣する箇所前で、「又十郎藏人恨^{ミテ}兵衛佐^を超^へ信濃^を与^レ木曾成^ル一^に」と記している。また、後期読み本系と目される延慶本、長門本、盛衰記では、本段冒頭で行家が頼朝の恩賞に対する不服から義仲の下に走り、為に頼朝は義仲・行家勢が攻めてくるのを推測することが予め詳述されているのである。一方讒奏者については、四部本は両者の仲違いが一件落着した後で、「是^レ無^レ差^シモ事木曾同意^と平家可^キ責^ム東国^を之由聞^下武田五

郎信光の讒言^上」と信光が頼朝に注進したことを暴露し、後期読み本系も同様、最後にこれを置いている。更にいずれも、頼朝が木曾進攻を推測した直後にも彼の注進を挟み、頼朝もまた出陣を決意するという筋立てにしているのである。

両系統を比較してみると、語り系では作者の関心の対象が読み本系のそれから移行していることが明瞭である。読み本系では、頼朝がなぜ義仲に疑いをもち続けるのかが、充分説明されているのが、語り系では彼等の口が開かれるまで原因の解明はお預けとなり、しかも異本によっては讒奏者の存在もいまひとつ不明瞭なのである。寛一本では「慥に頼朝討べきよし、謀反のくはたてありと申者あり」だが、八坂系の中院本では「まさしうよりともうたるべきよしの、はかりごとをめぐらされけんなり」と伝聞の形となり、国民文庫本になると「まことは頼朝討べきはかりごとをめぐらされけるにこそ」と、遂に情報を提供した者の存在が消えてしまうからである。

このように、不和の原因を臆化したり抹消してまで語り系・八坂系が押し出そうとしたものは、『平家』中盤を大きく占める義仲と、これを排除する頼朝との確執であつたらう。義仲の弁明は共通の敵に立ち向かうべき大事な時に内輪もめは無意味ではないかというもので、その懸命に説く真摯な姿勢が胸を打つ。しかし頼朝の冷たい返事に、結局彼は嫡子義重を入質に差し出さねばならなかった。ここまでやり切った頼朝の意図が、都を占拠した義仲の思い上がりを抑えることにあつたことは明白だが、語り系は前述のように頼朝が一体誰の情報でしつこく義仲を疑い続けるのかをあえて伏せることによって、その不気味さを際立たせたのである。

義仲からすればこれは不本意この上ないことである筈だが、お人好しの彼は遂に終盤まで頼朝の狡猾さに気づくことができない。

「是は鼓判官が凶害とおぼゆるぞ。其鼓め打破ッて捨よ。今度は義仲が最後の軍にてあらむずるぞ。頼朝が帰きかむ処もあり、軍ようせよ。者ども」(巻八「鼓判官」)

これは法皇に弓引くことの無謀さを諫める今井兼平に対し、「あながちに法皇のとがめ給ふべき様やある」と自己の正当性を濟らせた後にみえる義仲の言葉だが、この中の「頼朝が帰きかむ処」とは、義仲が鼓判官知康の議を容れた法皇と対決するに際し、その闘いぶりを後に頼朝がどう評価するかを気にした言葉である。つまり義仲はこの時点に至っても、頼朝を同世代のライバルとしての盟友ないし源氏の棟梁として意識するに留まり、法皇―頼朝の堅固なスクラムにとりまかれた状況を感じることができないのである。(もっとも法皇と頼朝は初めから手を組み合った仲ではないらしい。巻八「法住寺合戦」で義仲討伐の為に範頼、義経が派遣される件りを屋代本でみると、

抑此人々ハ何事ニ都へ上ルソト云ニ平家都ニ御坐スル程ハ道ノ狼藉モアレハトテ東八ヶ国ノ御年貢ヲ君へ奉給事モナシ、平家都ヲ落テ後兵衛佐王地ニハラマレテサノミ年貢ヲ対捍セン事モ恐ナレハトテ兩三年カ未進ヲ沙汰シテ千余人ノ兵士ヲ副へ都へ被_(レ)進ケルヲ兼テ奏センカタメニ範頼、義経二人の舍弟ヲ被_(レ)進ケ

ル……

とあって、頼朝が義経らを送り出したのは、義仲征討の為でなく滞納していた年貢を京に収める意志を奉呈することにあつたとする。また同じく屋代本では、その後義経らの報告を受けた頼朝が、

兵衛佐木曾カ悪行アラハ何度モ頼朝ニ被_(レ)仰下テコソ被_(レ)追討ヘキニ無_(二)云甲斐_(一)朝泰ナントカ申ス事ニ付セ御坐テ御所ヲモ焼セ高僧達ヲモ多ク失ナハセ給ヘル事コソ返々モ浅猿ク存候ヘ

と、暗に無為無策の法皇を批判している箇所さえみえる。このように実は頼朝は法皇と一線を画していたらしいのに、屋代本以外の語り系がそれが消えているのは、官軍対義仲の図式を明瞭化する為であつたと考えられるのである。

さて、この義仲討伐に差し向けられた義経も、頼朝にあっては義仲とまったく同じ末路を辿らねばならなかった。「おほ方もなさけある物にて候なるうへ、女房な_(二)どのうろたへなげく事をば、いかなる大事をもてはなれ_(一)ず、」たゞ九郎判官程の人はなし(巻十一「文之沙汰」)と人望を集め出した弟の義経をも、頼朝は追放してゆく。『平家』は、その決断は梶原景時の讒言によるものとしているが、一部の者の讒奏で追放に至る図式はまったく義仲の場合と同じである。ただそれは表向きの理由で、その真意は義経の政治性の欠落に危険を感じ取つての措置であることは、「九郎ばかりし

ては争か世をしづむべき。人のかくいふにおご(ッ)ていつしか世を我まゝにしたるこそ」と、頼朝自らが語っていることが明らかである。腰越状での義経の切々たる訴えも、如上の政治的放逐が頼朝の念頭にある以上聴き入れられるべくもない。義経の朴訥さが伝わるほどに、頼朝の政略的非情さが際立つという関係になっている。卷十一「土佐房被斬」で、義経を討つべく派遣された土佐房昌俊を捕らえて義経は、「和僧いのちおしくは鎌倉へ返しつかはさんはいかに」と問うが、それに答える土佐房の「おしと申さば殿はたすけ給はんずるか」は鋭い。頼朝の善意を一途に頼り切っていた義経への、それは痛烈な反辞であり、その限りではまさに頼朝の本質を突いているからである。義経には、「虎口のさん言によ(ッ)てむなしく紅涙にしずむ(卷十一「腰越」)」と譏奏者の存在までは把握しながらも、頼朝の本意を見抜く言葉は遂にみえぬだけに、政治性の欠落したその悲哀性は一層強いと言えるのである。

では源氏頼朝の最後の相手であった平氏にとっては、頼朝はどのように映ってみえたのだろうか。平氏と頼朝との関わり合いをみると、頼朝と対面しているのは僅かに重衡、宗盛、頼盛、六代の四人にすぎないことに気づく。しかもその悉くが虜囚の身である。自由なときの平氏一門はすべて頼朝を遠くから眺めて、憤ったり嘆息したりするしかなかったわけである。

すべて虜囚の身である彼等に向かって、頼朝はどのように発言しているだろうか。まず重衡であるが、彼は信頼していた乳母子に逃げられ、自害もできずに捕らわれの身となってからは、神器と引き

換えの交渉成らず法然に会って受戒する。この後頼朝からの所望で鎌倉に送られ、ここで初めて平氏の武將と源氏の棟梁は対面したのである。十四歳の時伊豆に流されて後、実に二十五年。功成り名遂げて劇的な対面を果たした頼朝の感慨はいかばかりであったろうか。「平家をほろぼさんの案のうちに候へども、まさしくげんさんにいるべしとは存ぜず候き(卷十「千手前」)」にその胸中が窺える。彼が重衡をわざわざ鎌倉へ呼び寄せたのは、一つには年来の宿敵の実像に一度は触れてみたかったことがあるう。

その彼の前に現われた最初の平氏、重衡は思いの外、命を惜しまぬ堂々たる論を展開するのであった。頼朝は彼のわるびれぬ姿に感服し、しばし断罪を延引する。しかし最終的に助命などできぬことは百も承知していた。

「平家を別して私のかたきとおもひたてまつる事、ゆめ／＼候はず。」

以後何回かみる(頼盛にも宗盛にも言う)この言葉は、個人的怨恨を越えて対決し、滅亡させていかねばならぬ歴史的命運の厳しさを肌身で知ったからこそ繰り返し吐かれた弁明であろう。重衡に対しても頼朝は次のように、相手の命を奪わねばならぬのはもっぱら「帝王」や南都「大衆」など、自分以外の意向に沿わねばならぬからだと言っている。

「平家を別して私のかたきとおもひたてまつる事、ゆめ／＼候はず。たゞ帝王の仰こそおもう候へ」

「南都をほろぼしたる伽藍のかたきなれば、大衆さだめて申旨あ

らんずらん」

今や生殺与奪すべて掌中にあるかにみえる大將軍頼朝にしてなお、「世論」は無視できなかった。(巻十二「重衡被斬」で、南都大衆は重衡の身柄引き渡しを要求する。) またそれを敢て無視せぬところに、「公」的配慮と「私」情を混同しない彼の冷徹な状況把握が知られるのである。これが清盛や義仲だったら南都の意向など省みず、たちまち宿敵を処刑してしまうところであろう。おもえば義仲・義経らは実に、この「公」と「私」を混同してきたのだといえる。

このような頼朝だから、重衡の出家の申出も次のように言って認めない。

「それ思ひもよらず。頼朝が私のかたきならばこそ。朝敵としてあづかりたてまつたる人なり。ゆめ／＼あるべうもなし。」

頼朝がおおっぴらに私情を通したのは、減刑に尽力した池の尻に恩義を感じて、その子頼盛を助命したことだけであろう。(しかしそれすらも、後に重盛の子忠房がこの言葉に謀られて殺されたのをみれば貫徹されたとは言い難いのである。)

「このちやう(定)では、八嶋の大臣殿の見参にも入ぬと覚候。」

頼朝の自信ある予測通り、次には彼の前に宗盛が引き出された。

しかし宗盛は、毅然たる重衡とは対照的に卑屈な態度で終始し人々の冷笑を買う。このような人物の命を消すことは、頼朝にとって何のためらいも要らなかつたであろう。宗盛父子を斬刑に処するまでの経過の中には、頼朝内部の葛藤はまったくみられない。

平家の子孫は去文治元年の冬の比、ひとつ子ふたつ子をのこさず、腹の内をあけて見ずといふばかりに尋と(ツ)て失て(シ)ぎ。

頼朝の徹底した戦後処理は、源行家・義憲、小松忠房・宗実、平知忠、越中盛嗣と続くが、彼にとって最後の、そして最大の精神的負担を強いられた処分は平氏の末裔六代であつたろう。彼こそは平氏一代の息の根を止め得る相手でありながら、再び登場した文覚に制せられてはそれも叶わなかつた。今日の大成のきっかけを与えてくれた文覚への恩義と宿敵陶汰の使命との板挟みに、さすがの頼朝も一旦は斬首を延期せざるを得なかつたわけである(巻十二「六代」)。

しかし情にほだされて六代を助命することは、かつて平氏と自分の関係をみすみす繰り返すことにほかならない。「昔頼朝を相し給ひしやうに、朝の怨敵をもほろぼし、会稽の恥をも雪むべきものに候か(「六代被斬」)」と文覚に尋ねるところに、頼朝の相も変わらぬピリピリとした神経がみてとれる。

「謀叛おこさばやがてかたうどせうずる聖の御房也。」

しかも自分を焚きつけた文覚の存在が、今はかえって危険でもあ

る。「但頼朝一期の程は誰か傾べき。子孫のすえぞしらぬ」と未来の一門存続を懸念し、六代の出家後もなお「かしらをばそ^(ツ)」たりとも、心をばよもそらじ」と遂に彼の命を奪う頼朝こそは、あの平氏清盛と真に対置し得た人物であったことを証明している。

このような頼朝の「おそろし」さは、硬軟両様を使い分けた彼に近接した者たちには、かえってつかめなかったのかもしれない。その意味で、壇の浦の舟上で能登守教経が、「われとおもはん物どもは、よ^(ツ)て教経に組んでいけどりにせよ。鎌倉へくだ^(ツ)て、頼朝にあふて、物ひと詞いはんとおもふぞ。よれやよれ（巻十一「能登殿最期」）」と言いつつ放った言葉には、遠くにあればこそ敵を見えることのできた確かな視点が感じられる。この絶叫は、はるか彼方の鎌倉を一步も出ずそこから指令を発し続けながら、一門を追いつめた切った政略家頼朝に対し、隔靴搔痒の思いを以て平氏からぶつけられた唯一の恨言なのである。

5

以上のように『平家』における頼朝像は、平氏を倒すべく登場した歴史的必然性に適った人物として十全に描かれているとみられる。しかも覚一本を中心とする語り系の描きぶりは、舞台裏の指導者に徹した頼朝像を隈どるにふさわしい方法を以て進められたこともみてきた通りである。

ところで周知の通り、読み本系の頼朝には、①伊豆配流時代の事蹟（延慶本、盛衰記）、②文覚の閨歴および頼朝との邂逅（四部本、延慶本、長門本、盛衰記）、③旗上げ時の合戦（闘諍録、四部本、

延慶本、長門本、盛衰記）など、語り系にみられぬ長大な増補がある。これらの部分を語り系がなぜ採り上げなかったのかを、最後に考えてみたい。

ひとつは、これらは源氏に密着した事蹟が延々と続いているだけに、『平家物語』を平氏の物語とみる場合は破綻を招く部分と考えたことに拠ろう。と同時にこれらの箇所は、頼朝が勢威の頂点を築くまでの苦難の前歴であることに留意しなければならない。それは『平家』の関心が、生起する現象より衰退するそれにあることと呼応することだからである。これらの部分が語り系で大幅に縮小されたのだとすれば、それは一つには『平家物語』にとってここが傍流の話群であるという受け止め方をされたことに拠ろう。すなわち語り系がこれら頼朝の大成以前の経緯を容れなかったことは、ちょうど平氏の頂上を極めるまでの閨歴を極度に略記したことの裏返しであるといえる。すなわち『平家』の大部を占める平氏衰亡史の裏側には、源氏・頼朝の興隆史が密着していた。逆にいえば平氏の興隆期に頼朝の不遇期は重なるのだから、前者の部分の略記はそのまま後者の部分の略記につながるわけである。

以上のような事情によって、没落史を旨とする『平家物語』は、頼朝興隆譚を捨象したのだと思われる。覚一本型（仮称）語り系は、敗退する義仲、義経、衰亡する平氏らに見え隠れさせつつ、頼朝を極力外延的に描くことによって、読み本系とは一線を画す達成を示したのであった。

（一九六六年卒）

- (1) 『平家物語論考』巻五「征夷將軍院宣」
- (2) 『平家物語研究事典』「頼朝」の項の分類に負う。